

ふるまじと
再発見

豊川

お稲荷さんのお誘いに
南山大学教授 安田文吉

お稲荷さんといえは稲荷（いなり）寿司というのが自然ですが、ここは三河、もつたいなくも豊川稲荷のこと。今回は、僕の東海高校の後輩で、家庭教師でも教えた、豊川市医師会の会長樋口俊寛君の案内で、豊川を車で回ります。

お稲荷さんは、正しくは曹洞宗圓福山豊川閣妙嚴禪寺。寺伝によれば嘉吉元年（一四四一）、永平寺御開山道元禪師の法嗣寒巖義尹禪師から六代の法孫東海義易禪師の開創。本尊千手観音は寒巖禪師伝来のもの。文永四年（一二六七）、寒巖禪師が修行を終えて、宋からの帰りの船中で、「妙相端麗、稲穂を荷い、宝珠

を捧げ、白狐に跨がるお姿の霊神」である。屯積尼真天が示現、これを禪師自身の手で刻んで鎮守としました。この密教の鬼神屯積尼天が稲束を荷なって狐に跨がっていたところから、稲荷の称、稲荷と狐との関わりが出てきたそうです。明治十七年（一八八四）再改築で、門扉が如輪目（如鱗目：魚の鱗に似ている木目）



豊川稲荷総門



豊川稲荷の石の鳥居と拍狐



豊川稲荷本殿



豊川稲荷大提灯

の一枚板の総櫓造りの総門をくぐると大きな境内が眼前に広がります。今日は本寺役員で副住職の浅野修道師のご案内を頂きました。まずは総門に入って左手の石の鳥居に向かいます。この奥が稲荷本殿。鳥居両脇には狛犬ならぬ拍狐。左手寺宝館には国指定重文の木造地藏菩薩立像が二体。ずっと進んで、左に文政七年（一八二四）建立の豊楽殿（旧本殿の祈祷殿）、右に法堂（火炎宝珠の鬼瓦



豊川稲荷の霊狐塚



豊川稲荷奥の院

に注意)を見ながら大本殿へ。大本殿は明治四十一年起工、昭和五年春竣工。釘は一本も使わず、直径尺八寸(五十四糎)から三尺(九十糎)の丸柱が七十二本使われています。拝殿正面に「魚がし 豊得講」と書かれた朱の大提灯、本殿内陣には御本尊屯積尼天が祀られています。ここから宝雲殿、伝豊臣秀吉の念持仏の不動・文殊を安置する文久三年（一八六

安田文吉

一九四五年生まれ。
南山大学人文学部教授。
幼少から名古屋の芸能文化に親しみ、主な著書に「ゆめのあと・諸本考」「幕末・明治名古屋常磐津史」がある。
一九八七年よりNHK番組「北陸東海文さんの味な旅」などのレギュラーレポーターとしても活躍。





豊川稲荷庭園Ⅰ



豊川稲荷三重塔



豊川稲荷奥の院の笑顔の狛狐



豊川稲荷参道の千本幟と景雲門

三) 建立の禪堂(万燈堂)、弘法堂、大黒天堂(おさすり大黒天)などの諸堂を経て霊狐塚へ。霊狐塚の鳥居前には火炎宝珠を持った狛狐が。鳥居の内には石像の狐が幾百となくいて、その多さに圧倒されます。「豊川村史」に「境内に平八と称する狐及び数百の狐あるを以て、世に豊川稲荷と云ふ」(平凡社版「愛知県地名」)とあるのを再現しているようです。次は文化十一年(一八一四)建立の奥の院(旧本殿)。さらに、納符堂、

千本幟受付所、景雲門、三重塔から庭園、端に魚河岸などから奉納された額のある天保年間(一八三〇〜一八四三)再建の法堂(本堂)を回って立願所へ。霊狐塚から景雲門に至る参道には願を掛けた千本幟がぎっしり。立願所の奥は、四百畳敷千人の接待が可能な山内最大の書院最祥殿(大広間)。欄間の彫刻は見事。法堂から大本殿へ通じる廊下は、通天廊と呼ばれ、一部鴛張り。廊下の壁面には二十枚の豊川稲荷の絵図が掛けられています。



豊川稲荷庭園Ⅱ



「三州豊川妙厳寺図」(豊川稲荷) 明治11年

帰りは、天文五年(一五三六)今川義元寄進の山内最古の山門、左に除夜の鐘で知られた鐘楼堂、鎮守堂をみて総門を出ます。門前の表参道商店街は、平日にもかかわらず賑わっていました。

参道に戻って左折すると郷社豊川進雄神社。祭神は進雄命(素戔鳴尊)。社伝に拠れば、創立は大宝元年(七〇一)の



豊川稲荷山門



進雄神社

大干魃に牛頭天王を祀って行った雨乞いに発します。七月二十日前後の大祭には、笹踊りと綱火が奉納されます。笹踊りは雨乞い踊り。綱火(製法は秘伝)は鳥居から拝殿の間(約百メートル)に張られた麻綱に硝煙を込めた竹筒を発火させて走らせるもの。隣は曹洞宗祇園山徳城寺。本堂裏に弘法大師由縁の錫杖井戸。寺伝



豊川稲荷法堂



砥鹿神社



徳城寺の錫杖井戸（中央の井桁）



砥鹿神社御輿殿の田楽舞鬼面



砥鹿神社御輿殿の狛犬

では、弘仁十三年（八二二）の弘法大師の来臨の際、当地の水不足の解消のため、錫杖で地面を掘るとこんこんと水が湧き大師が出たということです。

ここから国道一五一号線へ出て北上し、東名高速道をくぐって少し行くと三河国一宮砥鹿神社里宮（奥宮は本宮山山上）。祭神大己貴命。社伝では、大宝年間（七〇一〜七〇四）文武天皇の病氣平癒祈禱のため、煙巖山（鳳来寺山）の勝岳上人を迎えに来た勅使草鹿砥公宣卿が本宮山で道に迷った時、老翁と童子が顕れ、その手引きで勝岳上人に会い、都へ伴うことができ、その祈禱で天皇の病氣は平癒しました。この老翁こそ本宮山の神で、名は「神の初めの神（大己貴命）」であ

ると名乗ったということです（天正二年（一五七四）写しの「三河国一宮砥鹿大菩薩御縁起」による）。宮司香取武さんのご案内で御輿殿の宝物を拝観。右の縁起もここにありますが、室町期の楠製の狛犬、元禄十二年（一六九九）奉納の田楽舞鬼面が面白い。千支の土鈴（今年は兔）もかわいい。

ここから国道を戻って、牧野町を右折、四本目のやや広い道を左折、三本目をさらに左折して少し行くと右側に、曹洞宗龍雲山妙音閣三明禪寺。本尊弁財天。妙音閣は、弁財天の異称が妙音天（美しい音楽を奏する天女）であるところからの称。寺伝では大宝二年（七〇二）の創建ですが、平安時代末に源平の争乱で焼失、南北朝時代に後醍醐天皇皇子で奥山半僧坊方広寺開山無文元遷が再興。三重塔（国重文）は享禄四年（一五三二）の建立。和様の初重、二層、禅宗様（唐様）の三層という和唐折衷様式は珍しいもの。本堂には、天文二十三年（一五五四）建造の本尊弁財天を安置する宮殿（国重文）が。弘治二年（一五五六）今川義元から寺領安堵城状が出されています。

三明寺を南へ、左折して県道五号線に入り、国道一五一号線を渡ると、三ヶ日に向かう国道三六二号線（姫街道）となりますが、さらに進むと左に三谷原町、右にど土筒町。この辺りの小高い堤が、洪水を未然に防ぐ装置としての霞堤です。さらに進むと豊川に懸かった当古橋があ



三明寺三重塔



霞堤



当古の渡し跡

ります。橋の少し上流に姫街道の当古の渡しがありました。大名行列の折は吉田（豊橋）から五七艘もの段（団）平船が回されたそうです（愛知県の地名）。

ここから戻って、三谷原交差点を右折、県道三一号線を渡って二本目を左へ松原用水に出会う辺りに牧野城跡。この城は、応永年間（一三九四〜一四二八）足利義持の命で新補地頭となった田口（田内）伝蔵左衛門成富が、四国讃岐からここ三河國中条郷牧野に移り、構えたもの。成富の息成時（古白）はさらに勢力を伸ばし、永正二年（一五〇五）に今橋城（吉



牧野城跡

田城）を築き、牧野城は廢城。現在は城郭の一角（土塁）を残すのみ。牧野氏隆盛の昔を偲ぶのも城跡での楽しみ。この後、牧野氏は今川氏に属して西三河の松平氏と対峙、紆余曲折を経て、吉田城陥落の後、永禄八年（一五六五）から九年にかけて松平氏に帰属、以後一族は各地の大名となり、明治まで続きました。再び国道三六二号線へ出て右へ進み、県道五号線に入り、中央通四の交差点を右折、桜木通四東の左側に桜ヶ丘ミュージアム。桜をテーマとした展覧会などが開かれています。ここから桜木通（県道三二号線）を左へ、荒古橋南を左折、両側に見事な桜並木の続く佐奈川左岸を下ります。日暮れも近くなりました。少し先を急ぎましょう。開運橋東を左折、豊川高東を右折、名鉄豊川線を渡って千歳通二を左折、県道四九五号小坂井谷川線へ出て下り、郵便局を通り過ぎたら丁字路を左折、少し行くと今川義元及び一色刑部少輔時家の墓所。義元の墓は五輪塔と宝篋印塔を足して二で割った様な珍しい形。



佐奈川桜並木

時家のはちよつと遠慮がちな五輪塔。こ
こは元々一色刑部の居城一色城。一色刑
部時家は、永享十年（一四三八）の永享
の乱で、足利持氏に与して破れ、翌十一
年、宝飯郡長山村（牛久保町）に一色城
を築城。ここの窪地に大牛が横臥してい
た因縁により、牛頭天王を祀って、浄土
宗牛頭山大聖寺を城郭内に建立しました
が、文明九年（二四七七）家臣波多野（秦
野）全慶に滅ぼされ、明応二年（二四九
三）その全慶も牧野成時に討たれ、以後
この辺り一帯は牧野氏の支配地となりま
した。今川義元は、永祿三年桶狭間の合
戦で織田信長に討たれましたが、その時
首を取られた義元の胴体のみを家臣がこ
こまで運んで葬り、仮に石の手水鉢をの
せて墓石の代わりにしました。これが義
元の胴塚と言われる所以です。

ここから県道四九五号線へ戻って右へ、
豊川信金を左折すると左側に牛久保の八
幡社。祭神は仁徳天皇と応神天皇。ここ
に天下の奇祭若葉祭（四月八日）があり
ます。豊川市教育委員会の立て看板によ
ると、一色城主牧野成時（古白）がある
年の四月八日にこの若宮殿（八幡社）参
詣の折、駿河の今川氏親（義元父）より
馬見塚（吉田）築城を命じられ、喜んだ
古白は社前の柏の葉で御神酒を献じて家



今川義元墓所



一色刑部墓所

臣と供に祝い、家紋を三ツ柏に改めまし
た。祭はこれに因んだもの。若葉祭の名
は、古白の「きのうけふ 若葉なりしか
杉の森」に拠っています。代々の城主は
若葉祭の時、主だった領民を城中に招い
て酒食を振る舞ったので、酔っ払った領
民は帰り道でござる路上に寝転んで
しまいました。その有様を今に伝えてい
るのが、祭の神幸行列最後尾の「やんよ
う神」の一行。路上に寝ころぶ様子が「う
じむし」に似ているところから、「うな
ごうじ祭」とも呼ばれています。
ここから少し東北へ、やや広い美和通
に出たら左へ、寺町交差点を右折した左



牛久保八幡社

側には、浄土
宗西派武
運山長谷寺。
ここに武田
信玄に仕え
た軍師山本
勘助の墓。
勘助は明応九年（一五〇〇）八名郡賀茂
村（豊橋市賀茂町）生まれ。十五歳で牧
野家家臣大林勘左衛門貞次の養子となり、
四十五歳で信玄に仕官、永祿四年、川中
島の合戦で討死。これを悼んだ長谷寺住
職で信玄と親交のあった念宗和尚が遺髪
を納れて建立したのがこの墓（五輪塔）。
本堂には、勘助襟掛守り本尊摩利支天が
（約四種）安置されています。
豊川はまだまだ回りたいのですが、日
もかなり西に傾いてしまいましたので今
回の旅を終わります。それにしても、こ
の辺りは戦国武将の逸話が多いことに驚
かされます。このような地元各地の歴史
にもっと目を向けていきたいものです。



摩利支天像（拡大）
※実物は約4cmの小像です

摩利支天像



山本勘助墓所